

意欲的に文章を書く児童を育てる国語科指導の工夫
ー表現モデルの作成と活用を通してー

研究企画係 今泉 優理 (小学校教諭)
高橋 崇子 (小学校教諭)
田中由美子 (小学校教諭)

I 主題設定の理由

中教審答申における国語科の改善の基本方針では、実生活に生きて働き、各教科等の学習の基本となる国語の能力の育成を求めている。新学習指導要領国語科において求められるのも、「他教科等の学習や実生活に生きて働く書く力」の育成である。「意欲的に文章を書く児童」とは、文章の具体的な書き方を理解するとともに、それを活用しながら文章を書き、「よく書けた」「書いてよかった」という成就感や達成感を味わっている児童である。

しかし、実際には、自分の思いや考えを書いて伝えることに苦手意識をもっている児童が多い。これは、従来の指導に見られた次のような問題による。

- ・ 文章を書くための観点を明確にして指導していないため、児童は、具体的な書き方を身に付けることができないでいる。
- ・ 文章を書くための観点を理解していないために、児童は自分の書いた文章を評価できないし、書いたことへの成就感も十分にはもてないでいる。

そこで、本研究では、書く文種に応じた表現モデルを作成し、その活用を通して、文章の書き方の観点到具体的に気付かせ、書くことへの意欲を高めていきたいと考えた。また、それが、「将来的に生きて働く書く力」につながる基盤になると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらいと課題解決策

1 ねらい

文種に応じた書き方の観点到気付くための表現モデルを作成し、それを活用することが、意欲的に文章を書く児童を育てるうえで有効であることを明らかにする。

2 課題解決策

(1) 表現モデルの作成

文章を書く場合、どんな材料を、どのように構成したり、叙述したりしていくかといった書き方の観点を理解する必要がある。本研究では、理解させたい書き方の観点を、学習段階を考慮しつつ文種ごとに明らかにし、児童がそれに気付くための表現モデルを作成する。

(2) 表現モデルの活用

- ① 記述前の段階で、表現モデルAとBとを比較する活動を行い、児童が書き方の観点到気付くことができるようにする。
- ② 記述後の段階で、書き方の観点到照らして互いの文章を読み合い、よさを具体的に伝える活動を行う。この活動を通して、児童は目的や意図に適った文章が書けたことを実感することができ、書くことへの意欲を高めていくと考える。

Ⅲ 課題解決のための具体的実践

【実践 1】

1 教材名 「そうぞうを広げて書こうー『たから物をさがしに』〔3年物語文〕

2 実践の結果と考察

(1) 表現モデルの作成について

物語は、冒頭部で状況や登場人物が設定され、事件とその解決が繰り返されて発端から結末に至るといった特徴をもっている。小学校第3学年の段階では、このような物語の基本的な特徴が「物語を書く観点」になると考えた。

そこで、本教材における学習で児童に気付かせたい「物語を書く観点」を、以下のようにとらえた。

- ・全体の構成として「はじまりーなかーむすび」の三つの部分からなること
- ・「はじまり」では、登場人物や時、場所が設定されること
- ・「なか」では、事件が起こり、主人公がその解決に取り組むこと
- ・「むすび」では、その後、主人公がどうなったかが書かれること

このような観点が明確に表れるのは冒険物語である。

「エルマーのぼうけん」や「海ぞくポケット」などの冒険物語は児童のお気に入りであるが、原文は文章自体が長く、児童自身が観点到ることは難しい。

そこで、児童に馴染みのある物語「ももたろう」「ブレーメンの音楽隊」の二編を教師が短く書き直したものを、それぞれ表現モデルA、Bとした。そして、このモデルAとBを比べて読む活動を通して、二つの物語に共通する書き方の観点到るに気付かせていきたいと考えた。

(2) 表現モデルの活用について

○ 表現モデルの活用①（記述前の段階）

第2時で「楽しい物語を書いてみんなに読んでもらう」という目的を確認した後に、「物語ってどう書くの?」と課題を投げかけた。

そして、表現モデルAとBを提示し、「物語を書くコツを見付けよう」「そのために二つの物語の似ているところ、同じところをさがしてみよう」と呼びかけた。

児童は二つの表現モデルを読んで、どちらも登場人物に動物が出てくることや、「あるところに…」で始まって主人公が旅に出ること、悪者を退治すること、最後は幸せ（平和）になること、大きく三つの場面で構成されていることなどに気付いていった。

書くことが苦手なA児も、はじめに動物たちが旅に出ることに気付いてワークシートに書き、その後は考えている様子だったが、友達の気付きを頷きながら興味深く聞いていた。学習後も「海ぞくポケット」を読み返し、どんなふうにかを考えている様子が見られた。

二つの表現モデルの共通点を見付ける活動を通して、多くの児童が物語を構成する「はじまり」「なか」「むすび」のそれぞれの部分に着目しながら、「物語を書く観点」に気付くこ

表1 主な学習活動

時間	主な学習活動
1	○冒険物語を書いて読み合うという目的をもつ。
2	○表現モデルAとBを読んで共通点を考え、物語の書き方の観点到るについて話し合う。 <表現モデルの活用①>
3	○話し合ったことをもとに、段落のまとまりごとに構成メモを書く。
4 5 6	○メモをもとに、1場面を1枚の原稿用紙に下書きする。 ○それぞれの場面が書けたら、ワークシートをつなぎ合わせる。場面と場面のつながりを考え、付箋紙に書いてそれぞれのワークシートの初めに貼る。
7	○書いた物語を友だちと読み合い、観点到るに沿ってよさを伝え合う。 <表現モデルの活用②>
8 9	○交流したことを生かして書いた文章を見直し（推敲）、清書する。 ○清書した原稿用紙を画用紙に貼り、製本する。
10	○学習を通してのふりかえりをする。 ○物語を図書室に置き、感想を伝え合う。

とができた。

これらの観点は、「物語のコツ」として模造紙に書いて教室に掲示することとし、児童が次時以降、これを意識しながら物語を書いていくことができるようにした。また、学習を進めていく中で児童が新たに気付いた観点（例えば、会話を入れて書いたり、場面と場面のつながりに気をつけて書いたりすることなど）を加えていくことで、児童がさらに工夫して物語を書いていくことができるようにした。

○ 表現モデルの活用②（記述後の段階）

物語の記述後、各自が「物語を書く観点」に照らして互いの文章のよいところを付箋紙に書いて伝え合う活動を行った。3年生という学年の発達段階や、書くことへの苦手意識をもっている児童の実態を考え、改善点よりもよさを中心に伝え合うこととした。

『『物語のコツ』の中のどれが上手にできているかを付箋紙に書いて友達に教えてあげよう』『『物語のコツ』にないことでも、上手だなと思ったところを教えてあげよう』と呼びかけたところ、児童は書いた物語を読み合い、見付けたよさを付箋紙に書き出していった。

その後、3人グループで、よさを書いた付箋紙を示しながら口頭で説明する活動を行った。『『はじまり』に主人公の紹介がしっかり書いている』『事件と解決がくわしく書いてある』など、「物語を書く観点」の中でよくできている観点を相互に伝え合っていた。また、「書き出しがわくわくしていい』『動物の様子がかくわしく書いてある』『主人公の性格が物語に表れていておもしろい』など、「物語を書く観点」以外のよさについても目を向けた児童もいた。

資料1 A児の第7時のワークシート

A児は、物語の書き方の観点を踏まえて文章を書くとともに、「題名をおもしろくしたり、主人公の女の子がやさしいので男の子を強がりにしたり～目を開けたら森に来ちゃったことを工夫しました」と書いていた。友達からは、「主人公のことが、はじまり・なか・むすびにしっかり書いてあったのでいいですね」「ガオーというライオンの声がかうまく表現できているので

自分の物語を完成させよう		友だちからもらった付箋紙	
<p>はじまりは、物語の書き方の観点を踏まえて文章を書くとともに、「題名をおもしろくしたり、主人公の女の子がやさしいので男の子を強がりにしたり～目を開けたら森に来ちゃったことを工夫しました」と書いていた。友達からは、「主人公のことが、はじまり・なか・むすびにしっかり書いてあったのでいいですね」「ガオーというライオンの声がかうまく表現できているので</p>	<p>そのほかの観点 ① 主人公の紹介がしっかり書いている ② 事件と解決がくわしく書いてある ③ 動物の様子がかくわしく書いてある ④ 主人公の性格が物語に表れていておもしろい</p>	<p>文字や言葉 ① 漢字を上手に使っている ② 漢字の読みがきをつけている ③ 漢字の書き方がよくできている ④ 漢字の大きさや位置が適切</p>	<p>物語のコツ ① はじまりに主人公のしょうかいがよくなるように書いている ② なかに起こったことか解決の手段がかくわしく書かれている ③ むすびに主人公がどうなったかがかきつけられている ④ 会話と場面をつながりよく書いている ⑤ 会話と場面をつながりよく書いている</p>
<p>いいですね</p>	<p>ガオーというライオンの声がかうまく表現できているのでいいですね</p>	<p>漢字が上手に使われているのでいいですね</p>	<p>動物の様子がかくわしく書いてある</p>

いいと思います」「会話を使って書いていいですね」「題名がわくわくするのでいいですね」などといった付箋紙をもらった。学習後の感想には、「友達にいいところを書く紙をいっぱいもらったのでうれしかったです（以下略）」（資料1）と書いた。自分の文章のよさや工夫を具体的に友達から指摘してもらったことで、文章がよく書けたことを実感することができ、成就感をもつことができたことが伺える。

他の児童の感想の中にも、「友だちにたくさんよいところを見つけてもらってうれしかった」「上手に書けているとわかってよかった」など、成就感を味わえたことがうかがえるものが多かった。書くことに苦手意識をもっていた児童も、「書いてよかった」「書き方がわかった」という感想を述べている。物語の書き方がわかり、友達に具体的によさを認めてもらう経験をすることで、書くことに自信をもち、書いてみたいという意欲を高めることができたと考える。

【実践2】

1 教材名

「まとなりやじゅんじょを考えようー『生き物ふしぎブックをつくろう』」〔3年説明文〕

2 実践の結果と考察

(1) 表現モデルの作成について

説明文は、情報や筆者の主張を読み手に納得してもらうために、具体的な事例などを用いながら筋道を立てて書いた文章である。最初に話題提示をして読者を引きつける工夫をしたり、具体的な事例を意図的に並べたりするなど、読み手に分かりやすく伝えるための工夫がされている。

児童はこれまでの「読むこと」の学習の中で、そのような説明文の基本的な構成を押さえて読む学習は行ってきた。しかし、それを説明文を書くという学習に生かすという経験はほとんどしていない。

そこで、本教材の学習で児童に気付かせたい「説明文を書く観点」を、以下の四点とした。

- ・ 「始め（問題提示文）・中（調べたこと）・終わり（まとめ）」の三段落構成とする。
- ・ 「始め」の段落では、自分の伝えたい生き物について問題提示をする。
- ・ 「中」の段落では、順序を表す言葉を使いながら複数の具体的な事例を書く。
- ・ 「終わり」の段落では、「中」の事例を受けながら問題提示文に対するまとめを書く。

表現モデルは、既習の説明文であり内容が把握しやすいこと、題材が生き物であり児童が書く際の参考にしやすいことなどから「めだか」の一部をリライトし、「めだかの身の守り方」という題名をつけ、二種類を作成した。

特にここでは、「問いー事例（答え）ーまとめ」が論理的一貫性をもっていることや、「中」の事例が複数ある方が読み手に納得してもらえらることなどに気付かせたいという意図があった。そこで、表現モデルAは、上記の四つの観点が盛り込まれている説明文、表現モデルBは、「問い」とそれに対する事例が一つしか書いていない説明文とし、双方を比べ読みしていこうと考えた。表現モデルAの方が分かりやすい理由を考えるという活動を通して、上記の「説明文を書く観点」に気付かせたいと考えたからである。

表現モデルAは、「始め・中・終わり」の三段落構成とし、始めは問いの文で問題提示、中は身の守り方の例を四つ、終わりは「このように」を使ってまとめの文となるようにした。また、表現モデルBでは、中の段落の順序を表す言葉の重要性や事例の数に気付かせるために、身の守り方の例を一つだけとし、順序を表す言葉を削除して作成した。

(2) 表現モデルの活用について

○ 表現モデルの活用①（記述前の段階）

第2時では生き物の秘密についての説明文を書くという目的を明確にした後に、表現モデルAとBを2種類提示し、「どちらが分かりやすいだろう。なぜ分かりやすいのだろう。」と疑問を投げかけた。（表2）

児童は、表現モデルの比較から、Aが分かりやすい説明文であることにすぐに気付いた。

そして、「『このように』という言葉が使われているので、まとめの段落がすぐ分かる」「最初に問いの文がある」などという発

表2 主な学習活動

時間目	主な学習活動
1	○図書室で本を見て、生き物について説明文を書くという目的意識をもつ。
2	○表現モデルAとBを比較し、説明文を書く観点について話し合う。 ＜表現モデルの活用①＞
3～6	○本や図鑑から必要な事柄を取り出し、調べたことを事柄ごとに用紙を分けて書く。
7	○中の段落について、調べた事柄を並べる順序や接続語の使い方について考える。
8	○構成表を基に、段落を意識して、説明文を書く。
9	○説明文を読み合い説明文を書く観点に沿って気が付いたことを伝え合う。 ＜表現モデルの活用②＞
10	○交流したことをもとに書いた説明文を推敲し、清書する。
11	○説明文を友達と交換して読み合ったり、2年生に読んでもらったりする。

言を契機に、児童は「始めに問題提示をして、それについてのまとめが最後の段落にある」という段落構成に気付いていった。「始めと終わりの段落の間には、何が書かれているか」と投げかけると、問いに対する答えで身の守り方が具体的に詳しく書いてあることにも着目していった。

また、「中」の部分について、「身の守り方の例がたくさん書いてあるから分かりやすい」という発言も見られ、読み手になるほどと思わせるには、複数の具体例が必要であることにも目を向けていった。さらに、「いくつの身の守り方が書いてあるのか。それはどの言葉から分かるのか」と投げかけると、「『第一に、第二に』と書いてあって、『第四に』まで書いてある」と具体例の提示の仕方に着目した。また、形式段落内のキーセンテンスの位置にも気付くことができた。このように、読み手に納得してもらうには、複数の具体例や順序を表す言葉が必要であることに気付くことができた。これらの観点は、「説明文のコツ」として模造紙にまとめ、教室に掲示して今後の学習に生かしていきけるようにした。

気付いた観点に沿って書く活動では、段落を意識できるように、始めと終わりの段落を先に書くようにした。始めの段落は問いの文で話題提示、終わりの段落には「このように」を入れてまとめの文を先に書くことで、児童は論理的一貫性のある文章を、段落を意識して書くことができた。また、「まとめ」を先に書いたことで、自分の伝えたいことが明確になり、「中」の段落にどのような事例が必要かを考えて材料を選択して書くことができた。

○ 表現モデルの活用②（記述後の段階） **資料2 B児の第9時のワークシート**

清書前の段階で、書く観点に沿って友達の書いた説明文を読み合う活動を行った。（表2の9時間目）

「『説明文のコツ』の中のどれが上手にできているかを、付箋紙に書いて友達に教えてあげよう」と呼びかけたところ、児童は互いの書いた説明文を読み、見付けたよさを付箋紙に書き出していった。

B児は、友達から「はじめの段落に問いの文があって何を調べたのかがよく分かった」「つなぎ言葉があって分かりやすかった」「中の段落の一文目は大事な文、二文目からはくわしく書いてあってよく分かる」と自分の説明文のよさを付箋紙に書いてもらった。友達からよさを認めてもらうことで、自分の説明文が友達にきちんと伝わったことが分かり、自分のふりかえりでもよい評価を付けている。また、感想を読むと「よいところをいっぱい言ってもらってうれしかった」「説明文の書き方がいろいろわかった」（資料2）と書いている。交流をし、友達にほめてもらうことが「書いてよかった」という意欲につながったことが分かる。

児童は、「説明文のコツ」がふりかえりのポイントとなっていることで、相互評価の観点が明確になり、友達の説明文のよさを具体的にたくさん書き出すことができた。さらに、友達から自分の説明文のよさを教えてもらうことにより、自分の説明文のよさに改めて気づき、「上手に書くことができた」「友達に自分の考えを分かりやすく伝えることができてよかった」と感じることもできた。と考える。

児童は、「説明文のコツ」がふりかえりのポイントとなっていることで、相互評価の観点が明確になり、友達の説明文のよさを具体的にたくさん書き出すことができた。さらに、友達から自分の説明文のよさを教えてもらうことにより、自分の説明文のよさに改めて気づき、「上手に書くことができた」「友達に自分の考えを分かりやすく伝えることができてよかった」と感じることもできた。と考える。

説明文を書くこう 年5
三年 組 番 名

自分の説明文を見直そう。
①まだわからなかったカードをもう一度読もう。

はじめの段々から
①はじめの段々から何を調べたのかがよく分かった。
②つなぎ言葉が分かりやすかった。
③中の段落の一文目は大事な文、二文目からはくわしく書いてあってよく分かる。

ふりかえりのポイント

①「はじめの段々から何を調べたのかがよく分かった。」	○
②「つなぎ言葉が分かりやすかった。」	○
③「中の段落の一文目は大事な文、二文目からはくわしく書いてあってよく分かる。」	○
④「『第一に、第二に』と書いてあって、『第四に』まで書いてある。」	○
⑤「『中』の形式だんまは、一文目からくわしく書いてある。」	○
⑥「『中』の形式だんまは、一文目からくわしく書いてある。」	○
⑦「『中』の形式だんまは、一文目からくわしく書いてある。」	○
⑧「『中』の形式だんまは、一文目からくわしく書いてある。」	○
⑨「『中』の形式だんまは、一文目からくわしく書いてある。」	○
⑩「『中』の形式だんまは、一文目からくわしく書いてある。」	○

感想を書き出そう。

よいところをいっぱい言ってもらってうれしかった。
説明文の書き方がいろいろわかった。

はじめの段々から何を調べたのかがよく分かった。
つなぎ言葉が分かりやすかった。
中の段落の一文目は大事な文、二文目からはくわしく書いてあってよく分かる。

ふりかえりのポイント

①「はじめの段々から何を調べたのかがよく分かった。」	○
②「つなぎ言葉が分かりやすかった。」	○
③「中の段落の一文目は大事な文、二文目からはくわしく書いてあってよく分かる。」	○
④「『第一に、第二に』と書いてあって、『第四に』まで書いてある。」	○
⑤「『中』の形式だんまは、一文目からくわしく書いてある。」	○
⑥「『中』の形式だんまは、一文目からくわしく書いてある。」	○
⑦「『中』の形式だんまは、一文目からくわしく書いてある。」	○
⑧「『中』の形式だんまは、一文目からくわしく書いてある。」	○
⑨「『中』の形式だんまは、一文目からくわしく書いてある。」	○
⑩「『中』の形式だんまは、一文目からくわしく書いてある。」	○

【実践3】

1 教材名 「考えを伝え合って深めよう—『お米を食べてください』」〔5年意見文〕

2 実践の結果と考察

(1) 表現モデルの作成について

「意見文」とは、自分の主張を読み手に納得してもらうために、根拠などを筋道立てて論理的に表現した文章である。児童はこれまでに、身近に起こった出来事や体験を書いたり、自分の課題について調べて分かったことを報告する文章を書いたりなどしてきた。しかし、意見文を書く学習は初めてである。そこで、そのような学習段階の児童にとらえさせたい「意見文を書く観点」を表3のように整理した。そして、これらの観点到児童が自ら気付いていけるように、二つの表現モデルを作成した。

これらの観点の中で特に、この学習段階の児童に気付かせたいのは、意見文が主張の部分とそれをささえる根拠の部分から成り立っていること、主張が明確になるような文末表現であること、主張を繰り返すことで読み手への印象が強まること等である。

そこで、表現モデルA、Bの作成にあたっては、以下の点に留意した。

- ・ 表現モデルA、Bともに「給食を残さず食べよう」と主張する意見文とする。
- ・ 表現モデルAは、給食の残量が多いという事実と、「給食を残さず食べよう」という主張のみを書いたものとし、表現モデルBは、表現モデルAの内容に、主張を裏付ける根拠を加えたものとする。
- ・ 表現モデルBの根拠には、給食について調べて分かったこと、見たこと、聞いたこと、体験したことなどを盛り込み、児童が主張の根拠を考える手がかりとなるようにする。

(2) 表現モデルの活用について

○ 表現モデルの活用①（記述前の段階）

本校の児童は、総合的な学習の時間に「米づくり」について調べる学習を行っている。自分たちで米作りを体験する中で、お米を食べることのよさについても十分理解している。そのような児童に「ALTがお米を食べないこと」や「お米を食べない人が増えていること」を伝え、「お米のよさを意見文に書いて伝えよう」と呼びかけた。（表4の1時間目）

第2時では、「意見文の書き方を学ぼう」

という学習課題のもと、表現モデルA、Bを提示して「どちらの意見文に説得力があるだろう」と投げかけたところ、全員の児童が表現モデルBを選んだ。その理由を尋ねていくと、児童は「Bには根拠が書いてあること」や「根拠が三つ書いてあること」「Bでは始めと終

表3 とらえさせたい意見文を書く観点

始め	<ul style="list-style-type: none"> ・困っている事実を書く 「～です。」 ・自分の主張を書く 「～と考えます。」
中	<ul style="list-style-type: none"> ・主張を支える根拠（理由）を書く「～からです。」 ・根拠を明確にする。「第一に～」「第二に～」 ・根拠に、見たこと・聞いたこと・調べたこと・体験したことを書く。
終わり	<ul style="list-style-type: none"> ・まとめの文を書く。「このように～です。」 ・もう一度自分の主張を書く。「だから、～といたいです。」

表4 主な学習活動

時間目	主な学習活動
1	○お米を食べてほしいことを訴えるための文章を書くという目的をもつ。
2	○二つの表現モデルを比較し、「意見文を書く観点」に気付く。〈表現モデルの活用①〉
3	○自分の意見を伝えるために必要な材料を短冊カードに書く。
4 5	○書いた短冊カードを並べ、意見文として効果的な構成を考えながら、意見文を書く。
6	○書いた意見文を読み合い、「意見文を書く観点」に照らして、よく書けたところや直した方がよいところを伝え合う。〈表現モデルの活用②〉
7	○原稿用紙に清書をする。
8	○意見文の発表会をする。

わりに主張が書いてあるので、書き手の言いたいことが強調されていること」などに気付いていった。

『「始め・中・終わり」』にはそれぞれ何が、どのような表現で書いてあるのだろう」と尋ねていったところ、「根拠の部分には、『第一に、第二に・・・』という言葉を使って理由がいくつ書かれているかが分かりやすくなっていること」や「『・・・する方がよい』という文末表現なので筆者の考えであることがよく分かること」など筆者の主張やそれを支える根拠が、どのような表現で書かれているかということにも目を向けることができた。

このようにして児童が気付いた「意見文を書く観点」は、ワークシートに整理するとともに、教室に掲示しておき、以後の書く活動に随時生かしていくことができるようにした。

○ 表現モデルの活用②（記述後の段階）

意見文の下書きが終わった段階で、互いの意見文を読み合う活動を行った。

まず児童は、「意見文を書く観点」に照らして互いの意見文を読み、よくできている点を付箋紙に書き出していった。その後、書いた付箋紙を使って互いの意見文のよさを口頭で伝える活動に取り組んだ。また、その際には、友達の記事文を読んで気付いた改善点についても、口頭で伝えていくことを呼びかけた。

C児は、書くことに苦手意識をもっているが、自分の書いた作文に対して友達から『「始め」に困っている事実をたくさん書いている』ことや「お米を食べてほしい気持ちが伝わる」こと、「主張がよく書けている」ことなどを指摘され、「主張の仕方が分かってうれしい」という感想を発表した。

児童の中には、交流で得たアドバイスを基に自分の意見文を読み直し、推敲して文章を練り上げようとする児童もでてきた。また、友だちからもらう付箋紙には、「お米を食べてほしいという気持ちが伝わってくる」「お米のよさがたくさん書いてある」「なるほど、と思えるような根拠が三つも書かれている」など、意見文の書き方に関わるよさが多く書かれていたことから、意見文の書き方の観点をしっかりとらえて友達の文章を読んでいることがうかがえた。

交流後の感想では、「意見文の書き方がわかった」「意見文がよく書けてうれしい」「みんなからほめられてうれしい」といった記述が見られた。（表5）

このことから児童は、「意見文を書く観点」に照らして互いの文章のよさを交流し合ったことで、自分の文章がよく書けたことを実感するとともに、「書いてよかった」という思いをもつことができたと考える。

表5 児童が書いた交流後の感想（全児童22名 複数回答）

感 想	人数
意見文の書き方がわかった。	6人
自分の意見が伝わるとうれしい。	6人
意見文がよく書けてうれしい。	4人
みんなからほめられてうれしい。	3人
また、書きたい。	3人
難しかった。	3人
書いて、楽しかった。	2人
友だちの書き方のよいところが発見できてよかった。	2人
友だちの作文から気持ちが伝わってきた。	1人

IV 成果と課題

○成果

- ・ 表現モデルを活用した「書く観点」を明確にする活動を通して、児童は文章の書き方を具体的に理解することができた。
- ・ 記述後の交流では、「書く観点」に即して読み合い、よさを具体的に指摘し合うことで、自分の文章をよりよくするための観点到り付いたり成就感をもったりすることができた。

○課題

- ・ 学年内や学年間の系統を踏まえ、文種ごとに「書く観点」を明らかにしていく必要がある。

国語科学習指導案

小学校3年 指導者 高橋 崇子

1 目指す言語能力

[指導事項ウ] 段落のまとまりに気を付けて書くこと

[指導事項エ] 書こうとすることの中心を明確にしなが、段落と段落との続き方に注意して書くこと

2 単元名

そうぞうを広げて書こう
「たから物をさがしに」

3 考察

(1) 児童の実態 (男子10名 女子16名 計26名)

<関心・意欲・態度>

書くことが「好き」と答えている児童が全体の50%、書くことに苦手意識をもっている児童が全体の25%程度いることから、自分の伝えたいことを文章に表す活動については、意欲・関心の差が大きいことがわかる。苦手意識をもっている児童は、その理由として、どう書いていいかわからないという表記上の課題や、書くことを見付けられないという取材上の課題を挙げている。また、書くことが「好き」と答えている児童の多くが、その理由として自分の思いを伝えられるよさを挙げており、書いてみたい文種として、一番多かったのが物語や詩などの創作であった。

1学期に学習した「おもしろいもの、見つけた」では、社会科の学習で行った学校のまわりの探検で見つけたことを友達に知らせるとい相手意識・目的意識を明確にして書くことで、伝えたいという意欲をもって報告文を書くことができた。また、招待状を書く学習や本の帯作りをする学習では、モデルからどのように書いたらよいかを話し合う活動を通して、書き方を知り、多くの児童が意欲的に書く活動に取り組むことができた。

相手意識や目的意識を明確にし、書き方をしっかり身に付けていくことで、児童は自信をもって活動に取り組むことができ、苦手意識をなくしていけるのではないかと考える。

<書くこと>

1学期に行った「おもしろいもの、見つけた」で、児童は伝えたいことを取材し、事柄ごとに段落を分けて分かりやすく書く活動を経験している。取材した中から書きたい事柄を選び、メモをもとに段落のまとまりごとに順序を考えて書くことができた児童が多かった。段落ごとに改行し、一字下げで書き始めるということもほとんどの児童が意識して学習ができた。

ただ、これらの技能を生活日記や作文等で意識して活用できる児童は限られており、しっかり身に付けさせる必要性を感じる。また、これまでに招待状や観察日記、報告文など、さまざまな文種を書く活動を行ってきたが、文種に応じて適切に書き分けることは難しい。どのようなことに留意して書くかという観点を明確にすることが大切であると感ずる。

<言語事項>

音読発表会の招待状を書く活動や、「おもしろいもの、見つけた」の学習や、1学期から続けている生活日記などから、段落のまとまりを意識して書いたり、段落の始めの改行を適切にしたりできる児童は増えてきている。また、会話文の改行が適切にできる児童は全体の60%程度である。句読点や送り仮名などを正しく書いたり、学習した漢字を正しく使って書いたりするなどの表記がしっかり身に付いていない児童も数名いるため、個人差が大きいといえる。

(2) 教材観

本単元は、小学校学習指導要領国語科第3学年及び4学年の内容B「書くこと」の「ウ 段落のまとまりに気を付けて書くこと」「エ 書こうとすることの中心を明確にしながら、段落と段落との続き方に注意して書くこと」ができるようになることを主なねらいとしている。新学習指導要領においては、「イ 文章全体における段落の役割を理解し、自分の考えが明確になるように、段落相互の関係などに注意して文章を構成すること」の内容として位置付けられている。

本教材は、「たから島の地図」をもとに、想像をふくらませて物語を書く活動が中心になっている。児童は、2年時の「こんなお話を考えた」で、絵をもとに想像して自由に物語を書く活動を経験してきた。さまざまな困難や障害に出会い、それらを乗り越えながら目的地にたどりつくという冒険の物語は、児童にとってはテレビやゲームの世界でもなじみ深いものである。興味や関心をもって書き進めることができるであろう。また、一枚の地図から、さまざまな物語を生み出すことができる本教材は、児童にとってとても魅力的な教材である。書くことに苦手意識をもっている児童にとっても、自由な発想をもとに書くことができるこの教材は、抵抗なく楽しみながら書くことのできるものである。

目的地にたどり着く方法はさまざまであるが、登場人物がさまざまな危険を回避したり解決したりしながら宝物にたどり着く物語を想像して書く活動を通して、児童が「はじまり（主人公の紹介やきっかけ）」「なか（事件とその解決）」「むすび（結末）」という物語の構成に気付き、それぞれのまとまりを意識して書くことのできる題材であるといえる。さらに、まとまりごとのつながりをどのようにするかを考えていくことで、段落と段落の続き方にも注意して書くことができるであろう。また、モデルの比較を通して書く観点に気付かせ、それを踏まえて物語を書くことは、文種に応じてかき分ける力をはぐくんでいくことにもつながる。

以上のことから、本題材を通して、児童は、書くことを楽しみながら、事柄のまとまりごとに書く力を身に付けていくことができると考える。

4 目標

地図をもとに冒険の物語を書く活動を通して、物語を構成する「はじまりーなかーむすび」といった文章のまとまりに気を付けて書くことができるようにする。

5 指導方針

○「つかむ」過程

- ・「エルマーのぼうけん」や「かいぞくポケット」などの冒険物語の読み聞かせを行うことで、自分もわくわくするような冒険物語を書いてみたいという意欲がもてるようにする。
- ・「書いた文章は挿絵を付けて絵本にすることや、それを図書室に置いてみんなに読んでもらう」という相手意識・目的意識をもたせることにより、意欲をもって活動に取り組めるようにする。

○「追究する」過程

- ・二つのモデル文を提示し、比較しながら共通点を話し合うことにより、「物語を書く観点」を明確にし、それを一人一人がしっかり意識しながら書くことができるようにする。
- ・どの道筋を通るか、どんな動物と出会い、どんな事柄が起き、主人公がどのようにそれを解決するか、どのような結末になるかを想像し、それらをカードに書きながら順序を考えて並べることで、物語の構成を意識して書けるようにする。
- ・場面ごとに、1枚のワークシートに構成メモと下書き用の原稿用紙の短冊を貼ることで、「場面」を意識して書けるようにする。
- ・場面ごとに書いたワークシートをつなげる際に、つなぐ言葉を付箋に書いて貼ることにより、場面ごとのつながりを意識して物語が書けるようにする。
- ・下書きや推敲の際には国語辞典を近くに置かせ、正しい表記で書けるようにする。

- ・学習過程全体において、書いた文章を読み返したり、読み合ったりしながら見直す活動を取り入れる。下書きができた段階では、3～4人の小グループで読み合い、よいところを見付け合う活動を取り入れる。その際、書く観点に沿って交流することにより、「どこがよく書けたか」を実感し、書く喜びや成就感をもたせるとともに、よりよいものにするためにさらに推敲することができるようにする。
 - ・推敲後清書した原稿用紙は、切り取って画用紙に貼り、挿絵をつけ、絵本にする。一つの場面を1枚の用紙にまとめることで、段落を意識して物語を書くことができるようにする。
- 「広げる」過程
- ・友達と読み合ったり、図書室に置いて、他学級や他学年の児童にも読んでもらうことにより、「書いてよかった」「また書きたい」という自信や意欲を高められるようにする。

6 指導と評価の計画（10時間予定）

評価 規 準	(関心・意欲・態度) 地図をもとに想像をふくらませ、事柄ごとのまとまりを意識して書こうとしている。								
	(書くこと) 物語の構成を考え、事柄ごとのまとまりを意識して物語を書いている。								
	(言語事項) 句読点や会話の改行などに注意して書いている。								
過 程	時	主な学習活動	評価項目 [評価方法]	評価の観点					支援及び留意点 (◎十分満足 ☆支援が必要)
				関	話	書	読	言	
つ か む	1	○冒険の物語を書いて読み合おうという目的意識をもつ。	○物語を書いて読み合う活動に興味・関心をもって取り組もうとしている。 [発言・観察]	○					○「エルマーのぼうけん」や「海ぞくポケット」の読み聞かせをし、自分たちも楽しい冒険の物語を書いてみたいという意欲付けを図る。 ○書いたものは絵本にして図書室に置き、みんなに読んでもらうことを知らせ、意欲を高めていくようにする。
追 究 す る	2	○モデル文を読み、物語を書く観点について話し合う。 <物語を書く観点> 物語の構成 ・はじまり ・なか (事件や出来事とその解決) ・むすび	○二つのモデル文を比較し、共通点を話し合うことにより、物語を書くために必要な観点到に気付いている。 [ワークシート・発言]			○			○「ももたろう」と「ブレーメンの音楽隊」の二つの物語をモデル文として提示し、共通点を見付けることにより、物語を書く観点到に気付かせる。 ☆観点到に気付かない児童には、どちらも三つのまとまりで書かれていることに気付かせ、それぞれの場面に共通している部分は何かを考えるよう促す。

	<p>*はじまりの部分に登場人物や場面の設定が書かれている。</p>					<p>◎「様子や気持ちがよくわかるように書けている」「会話文が入っている」などの表現の工夫について気付いている児童がいたら意図的に指名し、物語を書く際の工夫としてまとめていくようにする。</p> <p>○気付いた観点は、教室に掲示し、常に意識しながら書く活動に取り組めるようにする。</p>
3	<p>○出会った動物との出来事を一つの場面として構成メモを書く。</p>	<p>○話し合ったことをもとに、物語の構成を考えてメモを書いている。 [ワークシート]</p>			○	<p>○児童の自由な発想を生かしつつ、空を飛ぶのではなく道を進むことや、全部の動物を敵にしなくてもよいこと、最後はハッピーエンドにすることなど、物語を書く上でのルールを話し合えるようにする。</p> <p>○登場人物や場の設定や通る道筋を考え、地図に道順を書かせるようにする。その後、出会う動物の挿絵が書いてあるカードを選び、場面ごとにどのような出来事が起こりそれをどのように解決するか、簡潔にメモを書くようにする。</p>
4 5 6	<p>○メモをもとに、場面ごとに物語の下書きをする。</p> <p>①登場人物や場面の設定 ②起こる出来事や解決の仕方 ③結末</p>	<p>○話し合った観点に沿って物語を書いている。 [観察・作品]</p>	○	◎	○	<p>○カード式の前稿用紙を用意し、前時に書いたメモを貼って1枚のワークシートにまとめることにより、場面ごとに下書きができるようにする。</p> <p>☆なかなか書き始められない児童には、教科書の書き出しをもとにして、続きを考えてよいことを伝える。</p> <p>○分からない漢字や言葉は、いつでも調べられるよう、国語辞典を机に置いておくようにする。</p> <p>○下書きの過程で児童が新たに気付いた書く観点も、</p>

										<p>新たな観点として教室掲示に付け足していく。</p> <p>○場面ごとの下書きを終えた時点で、ワークシートをつなぎ、場面ごとのつながりを見直す。必要に応じてつなぐ言葉を付箋に書いて貼るようにする。</p>
	7	○書いた物語を友だちと読み合い、交流する。	○物語を書く観点に沿って友達の作品のよさに気付いている。 「ワークシート話し合い」					○		<p>○物語を書く観点をもとに自己評価と相互評価を行うこととする。</p> <p>○観点を確認しながら、1観点につき1枚の付箋紙によいところを記入した後、気付いたことを伝えながら渡すようにする。</p> <p>○相互評価では、よく書けているところに目を向けさせ、成就感を味わえるようにする。</p> <p>◎書く観点以外のよさにも目を向けさせていくことで、一人一人が表現の工夫や物語の面白さ等にも気付き、自信がもてるようにする。</p>
	8 9	○交流したことを生かして、書いた文章を見直し（推敲）、清書する。	○交流して気付いたことを生かして推敲している。 [作品]					○	○	<p>○推敲の際は、下書きに赤でつけ足しや訂正を行い、交流を通して見直した部分が見えるようにする。</p> <p>○観点を意識して見直しをさせる。</p> <p>○清書した原稿用紙を、場面ごとに画用紙に貼らせる。場面ごとに1枚とし、そこにさし絵を入れるなどの工夫も取り入れ、表紙をつけて製本するようにする。</p>
広 げ る	1 0	○仕上がった作品を友だちと読み合ったり図書室においてみんなに読んでもらい、感想を伝え合う。	○友だちの作品を読むことを楽しんでいる。					○		<p>○おもしろかったところや、工夫しているところをカード（付箋）に書いて貼ってもらおうようにし、また書いてみたいという意欲につなげられるようにする。</p>

7 第2時の学習

【授業改善の視点】

物語文を書く活動における記述前の段階で、2つのモデル文を比較する活動を行うことにより、児童は物語における書く観点到に気付くことができるであろう。

(1) ねらい

2つのモデル文を比較し、共通点を話し合うことにより、物語を書くために必要な観点到に気付いている。

(2) 準備

掲示用モデル文（拡大）・配付用モデル文（児童分）・ワークシート・たから島の地図

(3) 展開

過程	学習活動 (評価項目)	時間	支援及び留意点 (◎支援が必要 ☆十分満足)
つかむ	<p>1. 掲示した地図を見て、物語を書くことを確認してから、本時は、物語を書くために必要な「物語を書くコツ（観点到）」を話し合うことを知らせる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>だれにでも物語を書ける コツをさぐろう！</p> </div>	5分	<p>○前時の学習を思い出させ、楽しい冒険の物語を書きたいという意欲を再度もたせるようにしてから、本時の学習について伝えるようにする。</p>
追究する	<p>2. 二つのモデル文を読み、共通している書き方について話し合う。</p> <p><予想される児童の反応></p> <ul style="list-style-type: none"> ・動物が出てくる。 ・三つに分かれている。 ・はじめのところで主人公が旅に出る。 ・主人公が悪者をやっつける。 ・最後は「めでたしめでたし」。 <div style="border: 3px double black; padding: 10px; margin: 10px auto;"> <p>評価項目</p> <p><おおむね満足> 物語を書く際に必要な観点到に気付いている。</p> <p><十分満足> 物語を書く際に、必要な観点到や表現の工夫について気付いている。 [ワークシート]</p> </div>	25分	<p>○二つのモデル文の読み聞かせをしてから、印刷したものを配り、比較させるようにする。</p> <p>○二つとも物語文であることを確認し、今日は、物語を書くときに大切なことを見付けていくことを伝える。</p> <p>○気付いたことをワークシートに書いてから発表し合うようにする。</p> <p>○児童の発言の中から、観点到に迫る発言を広げていけるようにする。</p> <p>◎なかなか見付からない児童には、どちらも三つのまとまりで書かれていることに気付かせ、それぞれの場面に共通している部分は何かを考えるよう促す。</p> <p>☆会話や様子を表す言葉が入るなどの表現の工夫について気付いた児童がいた場合には意図的に指名し、「物語を書くときに工夫するとよいことの一つ」としてまとめていく。</p>

	<p>3. 話し合ったことから、物語を書くためのコツをまとめる。</p> <p>物語の構成について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ はじまり (主人公のしょうかい) ・ なか (事けんや出来事とそのかい決) ・ むすび (主人公がどうなったか) 	12分	<p>○「エルマーのぼうけん」やこれまでに3年生で学習した「きつつきの商売」「三年とうげ」などもそうであったこと、児童の好きなテレビ番組も一話ごとにこのような構成になっていることなどについても触れ、物語を書く観点を明確にできるようにする。</p> <p>◎自分で思い付くことが書けなかった児童には、板書したことをヒントにして、大事だと思ったことを書けるようにする。</p> <p>○話し合っまとめた物語を書く観点は、整理して清書し、教室に掲示することとし、これからの学習を進めていく際に、常に意識していけるようにする。</p>
まとめる	<p>4. 本時に話し合ったコツ(観点)をもとに、冒険の物語を書いていこうというめあてをもつ。</p>	3分	<p>○たから島の地図を見て、次回は、話し合ったことをもとに物語を書いていくことを伝え、自分にも冒険の物語が書けそうだ、書いてみたいという気持ちをもたせて次時につなげられるようにする。</p>

8 第7時の学習

【授業改善の視点】

物語文を書く活動における清書前の段階で、互いの文章を「物語を書く観点」に沿って読み合う活動を取り入れることにより、児童は自分の文章のよさに具体的に気付くことができるであろう。

(1) ねらい

「物語を書く観点」に沿って作品を読み合う活動を通して、自他の文章のよさに具体的に気付くことができるようにする。

(2) 準備

児童用ふりかえりカード・掲示用のふりかえり項目(拡大)・3色の付箋紙

(3) 展開

過程	学習活動 (評価項目)	時間	支援及び留意点 (◎支援が必要 ☆十分満足)
つかむ	<p>1. 下書きをした物語を読み合い、よりよいものにしていこうというめあてをもつ。</p> <p>友達の作品を読み合い、よいところをたくさん見つけ合おう。</p>	5分	<p>○書いた作品を読み合うことで、よく書けているところを褒め合ったり、友達の作品のよいところを見付けたりして、自分の作品に生かすことが目的であることを確認する。</p>

<p>追究する</p>	<p>2. 物語を書く観点を確認し合う。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p><ふりかえりの項目></p> <p>①物語のコツ（ピンク）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・はじまり（主人公の紹介）、なか（事件とその解決）、むすび（どうなったか）がしっかり書けている。 ・会話をに入れて書いている。 ・場面と場面のつながりが上手に書けている。 <p>②文字や言葉（黄色）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・習った漢字を使って書いている。 ・誤字・脱字がなく正しく書いている。 ・句読点や改行に気を付けて書いている。 <p>③その他（水色）</p> </div> <p>3 観点に沿って友達の作品を読み合う。</p> <p>○作品を読み、付箋紙によかったところを書く。</p> <p>○気付いたよさを伝え合う。</p> <div style="border: 3px double black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>評価項目</p> <p><おおむね満足></p> <p>物語を書く観点に沿って、友達の作品のよさに気付いている。</p> <p><十分満足></p> <p>物語を書く観点に沿って、友達の作品のよさに気付くとともに、表現の工夫など、作品をよりよくする事柄に気付いている。 [付箋紙・交流]</p> </div>	<p>5分</p> <p>○拡大した物語を書く観点を提示し、これがワークシートにも記してあること、教室に掲示してある、これまでに話し合ってきた観点であることを確認する。また、これらは、自他の作品を見直す際のふりかえりの項目であることを確認しておく。</p> <p>27分</p> <p>○ワークシートに友達の作品のよかったところに丸をつけてから、それを①～③の項目ごとに色を変えた付箋紙（掲示してある観点と同じ色）に書かせるようにする。</p> <p>○どの子も互いの物語のよさを見付け、付箋を交換し合えるよう、3～4人の少人数のグループで交流する。</p> <p>◎なかなか書けない児童には、ワークシートの項目にもう一度目を向け、よかったところを見付けられるよう促す。</p> <p>☆その他の項目として、表現の工夫やおもしろさに気付いている児童には、積極的にそれを見付け、書いてよいことを伝える。</p> <p>○一人ずつよいところを伝えながら、項目（色）ごとに付箋を渡すようにする。同じような感想があったら「わたしも～さんと同じで、～。」と言って渡すなど、互いに発言を聞き合って交流できるようにする。</p> <p>○もらった付箋紙は、交流が終わったら、色ごとに整理してワークシートに貼らせるようにする。</p> <p>☆項目以外に気付いたよさが書けている児童に発表させ、工夫を取り入れ、より楽しい冒険の物語にしていけるとよいことを伝える。</p>
-------------	---	---

	<p>4. 自己評価をし、友達と交流したことをもとに感想を書く。</p>	<p>5分</p>	<p>○友達からもらったカードを読んでから、改めて自分の作品を見直し、自己評価をすることで、推敲するポイントに気付けるようにする。</p> <p>○友達との交流で気付いたこと、友達の商品のよさから取り入れたいことなどを含めて感想を書かせ、推敲に生かせるようにする。</p> <p>◎たくさん付箋紙に書いてもらったことで、自分がよく書けたところに気づき、「書いてよかった」という自信がもてるようにする。</p>
<p>まとめる</p>	<p>5. 友達と交流したことを生かして、物語を清書しようという見通しをもつ。</p>	<p>3分</p>	<p>○次回は、友達に教えてもらったことや友達の作品のよかったところを取り入れて、作品を見直し、清書することを伝え、よりよい作品にしようという意欲付けを図る。</p>

ももたろう

むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。ある日、おじいさんは山へしばかりに、おばあさんは川へせんたくに行きました。すると、川上から、大きなももが流れてきました。おばあさんは、そのももを家へ持ち帰り、おじいさんと二人で切ってみました。中からは、かわいい男の子。子どももないおじいさんとおばあさんは犬よろこびで、「ももたろう」と名づけ、大事に育てました。ももたろうは、二人のももで、りっぱなわか者に育っていききました。

そのころ、村では、おにがわるさをしては村の人をこまらせていました。ももたろうは、おにがしまにおにをたいじしにいくことにしました。

ももたろうは、おじいさんとおばあさんに作ってもらった元気がでるきびだんごを持って出発しました。

おにがしまに向かうとちゅうで、ももたろうは、まず犬に会いました。ももたろうは犬にきびだんごをわけてやり、犬が仲間になりました。しばらく行くと、さるときじにも会いました。ももたろうは、きびだんごを分けてやり、さるときじも仲間になりました。

おにがしまに着くと、おにたちはいっせいにとびかかってきました。きびだんごを食べたももたろうたちは、元氣いっばい。ももたろうといっしょに、三びきも力を合わせておにとたたかいました。犬はおにの足にくいつき、さるはおにの顔をひっかき、きじは空からおそいかかります。とうとうおにもこうさんしました。おにたちは、

「ごめんなさい。もうしません。」

と言って両手をついてあやまり、たからものをたくさんくれました。

村に帰ったももたろうは、おじいさん、おばあさんといっしょにいつまでもなかよくくらししました。おにがなくなつた村もすっかり平和になったという事です。

ブレイメンの音楽たい

ある村に、ろばと犬とねことおんどりがいました。年をとってはたらけなくなつてしまつたので、かい主からすてられてしまつたのでした。

ある日、四ひきは、ブレイメンの町をめざして旅に出ることにしました。ブレイメンの町には音楽たいがあり、そこではたらかせてもらおうと思つたのです。

けれども、町は遠く、森の中で日がくれました。こまつた四ひきがねる場所をさがしていると、木のてっぺんに上がったおんどりが、家の明かりを見つけた。四ひきは、その家をめざして歩きました。そこは、どろぼうの家でした。まどからそつとのぞくと、ごちそうとお酒と、さわいでいるどろぼうたちが見えました。

「すごいごちそうだ。食べたいなあ。」

四ひきは、知えを出し合つていいことを思ひつきました。ろばの上に犬が乗り、犬の頭にねこが乗り、ねこのせなかにおんどりが乗り、それ、一、二の三！

「ブヒヒーン ワンワンワン ニャオーン コケコッコー！」

どろぼうたちは、四ひきの声と、まどにうつたかげにびっくりし、ばけものがやつてきたとにげ出していききました。そこで、四ひきは家の中に入り、ごちそうをたらふく食べました。

おなががいっばいになつた四ひきがねむっていると、どろぼうたちもどつてきました。さあ、たいへん。四ひきは、どろぼうたちをおい出すことにしました。ねこがどろぼうの顔にとびついてひっかきます。あわてて戸口にげたどろぼうの足を犬ががぶり。うら庭にとび出したどろぼうのおしりをろばがパカーンとけり、やねの上でおんどりがなきたてました。これには、どろぼうたちもたまらずにげ出し、二度ともどつてきませんでした。

四ひきは、旅をやめ、この家でなかよくのんびりとくらししました。

国語科学習指導案

平成21年11月25日(水) 第3校時
3年2組(教室) 指導者 今泉 優理

授業の視点

説明文を書く活動における清書前の段階で、互いの文章を「説明文を書く観点」に沿って読み合う活動を取り入れることにより、児童は自分や友達の文章のよさに具体的に気付くことができるであろう。

I 目指す言語能力

- 自分の考えが明確になるように、段落相互の関係を考える能力 (「B 書くこと」ウ)
- 書こうとする事を中心を明確にしなが、段落と段落との続き方に注意して書く能力 (「B 書くこと」エ)

II 単元名

まとまりやつながりに気をつけよう
(教材：教育出版3年 「まとまりやじゅんじょを考えて」)

III 考察

1 児童の実態(男子14名、女子20名、計34名)

【国語への関心・意欲・態度】

国語の学習については、意欲的な児童が多く、発言も活発である。書くことについては、65%の児童が好きと答えている。書くことが好きな児童は、「書くことがたくさん浮かぶから楽しい。」という理由を挙げている。

一方、嫌いと答えている児童は、「書くことが見つからない」「書きたいことがあるが、どう書いていいかわからない」「自分の思いがうまく伝わらない」という理由を挙げている。書くことが嫌いな児童も、自分の思いをうまく伝えるための書き方が分かれば、意欲的に取り組めるのではないかと考える。

また、作文を書いてよかったと思うときは、「先生や家の人にほめられたとき」「長い作文を書き終えたとき」「すらすら書けたとき」という意見が多かった。書いたものが認められる体験を重ねることが、書くことへの自信にもつながるのではないかと考える。

【書くこと】

毎日連絡帳に三文程度の日記を書いている。三文程度の文章を書くことは、慣れている。思いついたことをそのまま書いており、順序や構成を考えて書く、様子を詳しく書くという意識はあまりない。行事の作文では、したことを順序よく書くことはできている児童が多い。気持ちや様子がよく分かるように会話文を入れたり、まとまりを考え上手に段落を分けたりして書ける児童は七名であった。作文では、「そして」「次に」を使って文章をつなげていく児童が多く、事柄ごとのまとまりを意識して区切りを考え、中心をはっきりさせて段落を構成する力はまだ身に付いていない児童が多いと考えられる。

9月の運動会前に、家の人へ運動会の招待状を書く学習を行った。手紙文の形式を学習し、同じ形式で招待状を書いた。形式については、ほとんどの児童がよく理解し、形式通りに書くことができた。内容については、モデル文を使い、招待状に必要な内容について話し合いを行った。話し合いを通して、児童は招待状に必要な事柄に気付くことができ、必要な事柄を入れて招待状を書くことができた。相手意識、目的意識が明確であったため、児童は意欲的に取り組み、相手に伝わる内容の招待状を書くことができた。

交流については、友達の作品を読み合い、誤字や漢字を直すことはよくできた。内容についての交流は、内容の評価の観点が明確でなかったため不十分であった。

【言語についての知識・理解・技能】

三年生になって習った漢字はたくさんあるが、漢字を正しく使うことに児童の意識に差がみられる。漢字を使えない児童は、使い方がよく分かっていない、漢字で書くことがめんどくさいなどの原因が考えられる。また、促音、助詞「は」「を」「へ」の表記の誤りがみられる、主述のねじれがあり、文脈の整った文章が書けない児童が数名いる。

国語辞典の使い方は、学習しており、辞書を引くことには、意欲的である。

2 教材観

本単元は、小学校学習指導要領国語科第3学年及び4学年の内容B「書くこと」の「ウ 自分の考えが明確になるように、段落相互の関係を考えること」「エ 書こうとする事を中心を明確にしなが、段落と段落との続き方に注意して書くこと」ができるようになることを主なねらいとしている。

本題材は、本で調べたことを基に、まとまりや順序を考えて説明文を書く学習である。文章全体を「はじめ・中・終わり」に分け、内容の中心となる「中」の部分をもどどのように構成するか、内容に応じてまとまりや順序を考える学習である。

児童は、いろいろなことに興味や関心をもち始め、知りたいことは調べてみようという意欲をもっている。特に、理科の学習で植物や昆虫について学習したり、説明文「めだか」でめだかについて身の守り方や小さなめだかのからだの仕組みについて読み取ったりしており、生き物についての関心は高い。

本題材では、まず、生き物について図鑑や事典を使って調べる学習を行う。子どもたちは目的意識をもって調べ、興味をもったこと、疑問に思ったことなどについて自分が調べて分かったこと、新しく知ったことを誰かに伝えたい、知ってほしいという思いをもつことになるであろう。

そこで、次に、調べたことを内容の中心とした説明文を書く活動を行う。生き物のひみつについて伝えるために、「はじめ」の段落で話題提示をし、「中」の段落で、調べたことを、事柄の内容ごとに段落を作って書き、「おわり」の段落で答えを書く段落構成とすることで、まとまりや順序を意識して書くことができるであろうと考える。

説明文とは、「書き手がある内容を、それについて知りたいと思っている人に要点を整理してよく分かるように説き明かす文章」のことである。児童は、今までに説明文という文種の意識をもって書く活動を行っていない。そこで、二つのモデル文を比較し、説明文にはどのようなことが必要かという「説明文を書く観点」を考える活動を取り入れることで、説明文の書き方を理解し、分かりやすい説明文を書くということを意識させたいと考える。「説明文を書く観点」は、書くときにはもちろん、交流する際に、相互評価の観点として活用することで、書く観点を意識して書く力を育てることができると考える。

以上のことから、児童が書くことに意欲的に取り組み、まとまりを意識して説明文を書く力を身に付けることができるようになると考え、本題材を設定した。

3 指導方針

【つかむ過程】

- 一人ひとりが書いた説明文をまとめ、クラスの生き物ふしぎブックをつくることを知らせる。生き物ふしぎブックを図書室に展示してもらえるようにすることにより、相手意識、目的意識を明確にし、説明文を書く意欲をもてるようにする。
- 2年生に向けて自分の書いた文章を読み聞かせをする機会を作ることにより、相手に分かりやすい説明文を書こうとする意欲をもてるようにする。

【追究する過程】

- 二つのモデル文を提示し、比較する活動を通して、分かりやすい説明文を書くための観点到に気付くことができるようにする。(説明文を書く観点・・・はじめ、中、終わりの三段落構成・順序を表す言葉、つなぎ言葉、材料の数)
- 「〇〇のひみつ」「〇〇の身の守り方」「〇〇のからだの仕組み」などのように題名を決め、生き物の何について書くのかをはっきりさせることにより、一つの生き物についてまとまりを考えて詳しく書けるようにする。
- 今までに学んだ「問いの文」「答えの文」を活用し、はじめの段落を意識できるように、調べたことを問いの文形式で表現するようにさせる。中の段落は調べたこと(答え)、終わりの段落は「このように」を使ってまとめをする段落構成とすることで、三段落構成のまとまりを意識して書けるようにする。
- 調べたり、下書きをしたり、推敲をしたりする際には、国語辞典を手元に置いておき、漢字や意味を確かめながら正しい表記ができるようにする。
- 必要に応じて、絵や図を入れて絵や図と文章を照応できるようにさせることで、分かりやすく生き物についての説明ができるようにする。
- 学習過程全体において、書いたものを読み返したり、読み合ったりしながら見直す活動を取り入れる。清書前の段階では、3～4人のグループで読み合い、説明文の観点到に基づいた、よいところを見付け合う活動を取り入れる。説明文を書く観点到を基に相互評価・自己評価を行うことで説明文の観点到を再確認させるとともに、分かりやすい説明文にするために推敲できるようにする。

【広げる過程】

- 友達と読み合ったり、2年生に読み聞かせをしたり、図書室に置いて他学年の児童にも読んでもらえるようにすることにより、「書いてよかった」「また書いてみたい」という成就感や達成感を味わうことができるようにする。

IV 目標

- 本や図鑑で調べたことを基に、生き物のことをまとまりを考えて分かりやすく作文に書くことができる。

V 単元構想

国語科 3年「まとまりやつながりに気をつけよう」 「まとまりやじゅんじょを考えて」 指導時期 11月	
目標	評価規準
<p>【関心・意欲・態度】 段落相互の関係を考えながら説明文を書こうとしている。</p> <p>【書く】 相手や目的に応じ、調べたことなどが伝わるように、段落相互の関係を注意して文章を書く。</p> <p>【言語事項】 指示語や接続語が文と文との意味のつながりに果たす役割を理解し、使う。</p>	<p>【関心・意欲・態度】 進んで調べ学習に取り組み、段落相互の関係を考えながら説明文を書こうとしている。</p> <p>【書く】 文章全体における段落の役割を理解し、自分の考えが明確になるように、段落相互の関係を考え書いている。</p> <p>【言語事項】 指示語の示す内容を理解し、接続語に気を付けて段落を分けて書いている。</p>
系統	2年「ようすやじゅんじょを考えよう」→3年「まとまりやつながりに気をつけよう」→4年「すじ道を立てて考えよう」

全11時間予定

小単元	時	ねらい	主な学習活動	支援・指導上の留意点 (●は「努力を要する」と判断される児童への具体的な指導)	評価項目 (具体的な評価規準・評価方法)
つかむ	1	<p>○教材文を読んで学習内容を知り、学習の見通しをもつ。</p> <p>○本や図鑑を読み、自分の調べてみたい生物を選ぶことができる。</p> <p><手立て1></p>	<p>○教材文を読み、どんな学習をするのかを知る。</p> <p>○図書室で本や図鑑を見て、自分の興味をもった生物について知る。</p>	<p>○生き物について説明文を書く学習であることを知らせる。</p> <p>○できた作品は2年生に読んでもらうことを知らせ、相手意識、目的意識をもたせる。</p> <p>○さらに作品を、「クラスの生き物ふしぎブック」としてまとめることを知らせることで、書いてみたいという意欲を高める。</p>	<p>○生き物について関心をもち、進んで本で調べようとしている。</p> <p>【関】(観察)</p>
追究する	2	<p>○モデル文から、説明文を書く観点を考えることができる。</p> <p><手立て2> 説明文を書く観点 ①三段落構成 始め・何について調べたのか(問いの文) 中・調べたこと(三つ以上の事柄) 終わり・調べたことのまとめ(「このように〜」) ②順序を表す言葉</p>	<p>○既習の「めだか」を使って説明文を書く観点について話し合う。</p> <p>○始め・中・終わりの三つの大きな段落に分けて、書く。</p>	<p>○二つのモデル文を比較することで、違いに目を向けさせ、分かりやすい説明文を書く観点を考えさせる。</p> <p>○形式段落内の文の構成や事柄を並べる順序に筆者の意図があることに気付いている児童がいたら、意図的に指名し、読む人を引きつけるための工夫としてまとめる。</p>	<p>○二つの説明文を比較し、分かりやすい説明文を書くために必要な観点到に気付いている。</p> <p>【書く】(ワークシート)</p>
	3 6	<p>○本や図鑑を使って、生物について調べたことと書ける。</p>	<p>○本や図鑑から必要な事柄を取り出し、用紙に分けて書く。</p>	<p>○「犬のしこさ」などのように「〜の〜」と名を考えること、書くこととを焦点化して、事柄ごとに用紙を分けて書く構成を考える時に並べ替</p>	<p>○本や図鑑から必要な事柄を取り出し、事柄ごとに書くことができる。</p> <p>【書く】(ワークシート)</p>

			<ul style="list-style-type: none"> ○調べ、がな ○意味分むる鑑と ●意自説が図次る。 	
	<ul style="list-style-type: none"> ○調べた事柄を並べ替えて、構成を考えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○中の段落について、調べた事柄を並べる順序や接続語の使い方について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○題名と合っ、てい、るか、ま、と、め、の、文、と、中、の、段、を、落、せ、ら、れ、る、事、柄、を、並、べ、る、順、序、を、考、え、さ、せ、る、よ、う、に、す、る。 ●順序を明確にさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○順序を表す言葉を使って、構成を考えている。【書く】(観察・ワークシート)
	<ul style="list-style-type: none"> ○構成表を基に、段落を意識して、説明文を書くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○構成表を基に、段落を意識して、説明文を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○始め・中・終わりの三段落、次の事柄に移るときは、一字下げて書くようにすること。 ●習った漢字は使うようにさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○構成表を基に、まとまりに気を付けて、説明文を書いている。【書く】(ワークシート)
	<ul style="list-style-type: none"> ○書いた説明文を読み合い、説明文を書く観点を基に、気が付いたことを伝え合うことができる。 <p><手立て3></p>	<ul style="list-style-type: none"> ○書く観点を基に、よいところをメモし、口頭でも伝え合う。 ○文字や表記の間違いがなければ自分で読み直す。 	<ul style="list-style-type: none"> ○説明文を書く意識を育てるために、書く観点を沿って自己評価と相互評価をするようにさせる。 ○書き出し、付箋紙を渡しながらか口頭でも伝え、発言を聞き合えるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○友達の作文を読み、説明文を書く観点を沿って、よさに気付いている。【書く】(ワークシート)
	<ul style="list-style-type: none"> ○推敲した説明文を丁寧に清書することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○作文用紙に丁寧に書き写す。必要に応じて挿絵をかく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○挿絵は文章と対応するように、よく分かるような書き方ができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○推敲した説明文を丁寧に書き写している。【書く】(ワークシート)
広げる	<ul style="list-style-type: none"> ○書いた説明文を友達と交換して読み合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○書いた説明文を読み合う。 ○感想を話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○友達の説明文のよかったところを発表させることで、よいところを確かめ合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○説明文を読み合うことに意欲的に取り組もうとしている。【関】(観察) ○友達の説明文のよいところを見付け、発表している。【書く】(発表)

VI 第2時の学習

1 ねらい

二つの「モデル文」を比較し、分かりやすい説明文はどちらかについて話し合いをすることにより、説明文を書くために必要な観点について気付くことができる。

2 準備

掲示用モデル文二種類（「めだか」リライト）・配付用モデル文（児童分）・ワークシート

3 展開

（☆はB規準に達するための支援）

過程	学習の流れと児童の様子	時間	活動への支援	評価
つかむ	○本時の学習のめあてをつかむ。	5	○本時の学習は、「説明文を書くコツ（観点）」を考えることを伝える。	
	めあて 説明文を書く名人になるために、分かりやすい説明文を書くコツを見つけよう。			
追究する	○二種類のモデル文を読んでどちらが分かりやすい説明文か、またその理由について考える。 発問 どちらがなるほどなあとと思う分かりやすい説明文でしょう。また、そう考えた理由は何でしょう。	30	○各自読んだ後に、モデル文を指名して音読させる。 ☆始めにワークシートに自分の考えを書かせることで、自信をもって発表できるようにする。 ☆どちらが分かりやすいか、なるほどと思うか、全員に判断させ、挙手させる。 ○理由は、文章の言葉を根拠に述べるようにする。	
	* 予想される児童の考え ◎ Aの方が分かりやすい。 理由 ○形式段落（文）がたくさんあるから。 ○いろいろな方法で身を守ることが書いてあるから。 ○「第一に、第二に」など順序を表す言葉があるから。 ○「このように」があつて、前書いていることのまとめがあるから。 ○身の守り方だけでなく、その理由が書いてあるから。 ○「身を守ります。」という言葉が何度も出てきているから。 ○問いの文があるから。			
	○読む人が分かりやすい説明文を書くために大切なことについて話し合う。		☆「順序を表す言葉」「このように」の言葉を線で囲むようにすることで、分かりやすく説明するための大事な言葉であることに気付けるようにする。 ○「問いの文」の発言を基に、文章全体の構成の仕方について考えさせることで、「はじめ・なか・終わり」の三段落構成について気付けるようにする。 ☆はじめは赤、なかは青、終わりは緑で囲むことで、文章構成を視覚的に捉えやすくする。 ○「いろいろな方法で身を守る」「たくさん書いてある」「理由が書いてある」の発言を基に、一文目で身の守り方、二文目以降で詳しく説明しているという形式段落の中の文章構成について気付けるようにする。	○説明文を書くときにどのように書けば分かりやすい文章になるかを言葉を根拠に考えている。 【書く】 （ワークシート）
まとめる	○分かりやすい説明文の書き方についてワークシートにまとめる。	10	○分かりやすい説明文を書くためのコツについて分かったこと（段落構成・文章構成についてなど）をワークシートに書かせることで、今日の学習を振り返らせる。 ○次時はこのコツを使って説明文を書くための材料集めをしていくことを伝え、分かりやすい説明文を書いてみたいという気持ちをもたせ、次時につなげられるようにする。	

第9時の学習

1 ねらい

書く観点を基に、作品を読み合う活動を通して、自他の文章のよさに具体的に気付くことができる。

2 準備

児童用振り返りカード・掲示用振り返り項目・付箋紙

3 展開

(☆はB規準に達するための支援)

過程	学習の流れと児童の様子	時間	活動への支援	評価
つかむ	○本時の学習のめあてをつかむ。	5	○本時の学習のめあては、友達の作品を読み合い、よいところを伝え合い、自分の作品を見直すことであることを伝える。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> <p>めあて 友だちの作品を読んで、よいところをたくさん見つけよう。</p> </div>				
追究する	○分かりやすい説明文を書く観点を確認する。 ○観点に基づいて友達の作品を読み合う。 ○友達の作品のよさを伝え合う。	30	○掲示した振り返りの項目を音読することで、よいところを見付ける観点となるようにする。 ○振り返りカードの項目は説明文を書く観点でもあることを確認することで、分かりやすい説明文を書けているか、相互評価できるようにする。 ○3～4人のグループで、友達の作品をじっくり読み合うことができるようにする。 ○書く観点を意識させるために、振り返りカードに○を記入してから付箋紙によりよいところを具体的に書かせるようにする。 ☆なかなか書けない児童には振り返りカードの項目についてよいところを見つければよいことを伝え、それについて書くよう助言する。 ○一人ずつよいところを伝えながら、付箋紙を渡すようにさせる。同じような感想があるときは、一緒に渡すようにさせることで、友達の考えを聞きながら、交流できるようにする。 ○もらった付箋紙は交流が終わった後に、整理して自分のワークシートに貼るようにさせることで、自分の作品を推敲するときにもう一度読めるようにする。	観点に基づいて友達の作品を読み、その作品のよさに気付いている。 【書く】(ワークシート)
まとめる	○自分の作品について自己評価をし、交流した感想を書く。 ○交流したことを生かして、清書しようという見通しをもつ。	10	○友達から聞いた感想やもらった付箋紙を読み直し、相手に分かりやすい説明文が書けたかの参考とすることで、振り返りの観点を基に自分の作品を客観的に評価することができるようにする。 ○友達との交流で気付いたこと、友達の作品のよさなど取り入れたいことを書かせることで、自分の作品のよさに気付けるようにする。 ○友達の作品のよかったところを取り入れて、作品を見直し、清書することを伝え、よりよい作品にしようという意欲をもたせ、次時につなげられるようにする。	

モデルA 「めだかの身の守り方」

めだかは、たくさんのてきから、どのようにして身を守っているのでしょうか。

まず、第一に、小川や池の水面近くでくらし、身を守ります。水面近くには、てきがあまりいないからです。

第二に、すいっ、すいっ、すばやく泳いで、身を守ります。

近づいてきたてきから、さっとにげることが上手です。

第三に、小川や池のそこにもぐって行って、水をにがらせ、身を守ります。近づいてきたてきにみつからないようにかくれるのです。

第四に、何十ぴきも集まって泳ぐことによって、身を守ります。てきを見つけためだが、きけんがせまっていることを仲間知らせると、みんなはいっせいにちらばります。そして、てきが目うつりしている間に、にげてしまいます。

このようにして、めだかは、たくさんのてきから身を守っているのです。

モデルB 「めだかの身の守り方」

めだかは、たくさんのてきから、どのようにして身を守っているのでしょうか。

めだかは、何十ぴきも集まって泳ぐことによって、身を守ります。

国語科学習指導案

平成21年10月27日(火) 第2校時
小学校5年指導者 田中由美子

I 目指す言語能力

全体を見通して、書く必要のある事柄を取捨選択したり整理したりすること

II 単元名 考えを伝え合って深めよう 「お米を食べてください」

III 考 察

1 児童の実態 (男子10名、女子12名、計22名)

【国語への関心・意欲・態度】

児童は、毎日日記を書くことに取り組んでいる。書く題材や分量はさまざまであるが、自分の思いや考えを書こうという意欲をもって取り組んでいる児童が多い。そのためもあり、「書くことが好き」と答える児童が全22名中17名と多い。「嫌い」と答える児童の理由は、「書くことが思い浮かばない」「書きたいことはあるが、どう書いてよいのかわからない」「作文を書く意図がわからない」というものである。書くことが好きという児童でも、作文を書くときに困ることとして、「書くことが思い浮かばない」「書き出しがわからない」「自分のいいたいことが伝わらない」ということを挙げている。児童は、自分の思いや考えを相手に伝えたいという願いはもっているものの、的確に伝えるにはどうしたらよいのかという悩みを抱えていることがうかがえる。

また、作文を書いてよかったと思うときは、「教師や家の人、友だちに褒めてもらったとき」「自力で書き上げられたとき」「書きたいことがすらすら書けたとき」であるという児童が多い。

以上のことから、児童に書く意欲をもたせるためには、まず、書くことへの必要感を高める場を工夫し、「だれに、何のために書くのか」といった相手意識、目的意識をはっきりさせることが大切であると考えます。また、自分の書いた文章のよさを認め合う場を設定していくことで「書いてよかった」「また、書きたい」という意欲につなげていきたい。

【書く能力】

1学期の「書くこと」の単元『情報を整理して書こう』では、総合的な学習や社会科の学習と関連付け、「おいしい米作りのひけつ」について調べたことを報告する文章を書いた。米作りにはどんな作業があり、その作業にはどんな意味があるのかということについて、「始め・中・終わり」の構成で「第一に、第二に・・・」など順序を表す言葉を用いて報告文を書く活動を行った。

2学期に入ってからは、「臨海学校の思い出」という題材で作文を書いた。書き出しや五感を働かせて気付いたこと（見えたもの・聞こえた音・におい・会話・感じたこと）などの表現を工夫しながら書く活動を行った。

いずれの活動の場面でも、書くことの能力の個人差が大きく、自分の思いや考えを適切に文章表現できる児童もいれば、書きたいことや伝えたい思いはあっても、それをどう書いていいかわからずに、筆が進まない児童もいる。

本単元で目指す「全体を見通して、書く必要のある事柄を取捨選択したり、整理したりする力」については、「書く材料を集めて並べる」といった書き方はしてきたが、書く目的や意図に応じて書く材料を収集したり、文章の組立に応じて書くことを整理したりして、読み手にわかりやすく効果的に伝えようとする文章は書いていない。

このような児童の書く力の実態を見ると、自分の伝えたいことをわかりやすく伝える文章を書くために、書く観点をはっきりさせ、書く必要のある事柄を取捨選択したり、文章全体の構成を工夫したりして書くことができるようになる必要がある。また、観点到に沿って文章を推敲したり文章のよさに気付いたりできるような場を設定することが大切である。

【言語についての知識・理解・技能】

毎日の日記を書く活動を通して、原稿用紙の使い方に気をつけて書いたり、段落ごとにまとまりを考えて文章を書いたりできる児童は増えている。しかし、文章にはさまざまな形態があることや、形態によって構成の仕方や文末表現の仕方が変わってくるなど、まだ理解していない。事実と意見の書き分けも、十分にはできていない。

多くの児童は授業中、常時机上に辞書を置く習慣が身に付いてきており、意味のわからない言葉があると、すぐに調べようとする姿勢が見られる。作文を書くときも、漢字を調べて書くような習慣は身に付いてきている。しかし、主語・述語・修飾語の学習をしても、普段の会話は単語のみの会話で終わっている場合が多い。また語彙が貧弱で、自分の気持ちを伝える表現は「楽しかった。」「うれしかった。」「くやしかった。」といった決まり文句で終わってしまうものも多い。よって、この時期に自分の思いや考えを的確に書いて伝える技能を身に付けることは、今後、人と人とのコミュニケーションを豊かにしていく上で大切であると考える。

2 教材観

小学校学習指導要領国語科第5学年及び6学年の内容「B書くこと」の目標は、「目的や意図に応じ、考えた事などを筋道を立てて文章に書くことができるようにするとともに、効果的に表現しようとする態度を育てる」ことである。

児童はこれまでの学習の中で、体験したことや感じたこと、自分の思いなどを書く活動や、調べたことを報告文に書く活動を経験している。自分の意見や主張を伝える活動では、ディベート的な話し合いを体験している。明確な根拠を挙げながら相手を説得していく話し合いを通して、筋道立てた考え方や見方が育ってきている。「自分も意見が言えてよかった。」「違う考え方がわかってよかった。」という感想をもっている。そこで、討論会での「話す・聞く」の体験をさらに深め発展させて、自分の意見を筋道立てて論理的に伝える「書く」活動を取り入れたい。そして、書いた文章を読み合い互いによいところを伝え合ったり、実際に意見を伝えてその効果を実感したりする場を設定したりすることで、「自分の考えを書いてよかった。」という達成感を味わわせたい。

本単元「お米を食べてください」では、総合的な学習で取り組んだり、社会科の学習で調べたりした「米作り」を通して、自分の考えたことを「意見文」という表現様式で伝える学習活動をする。児童は、「米作り」について調べることを通して、「米の生産量も消費量も減っていること」「日本人の食生活が変化し、それに伴って米離れが進んでいること」などを知り、「日本人の主食である米を、もっとたくさんの人に食べてもらいたい」という願いをもった。さらに児童は、「米のよさ」をアピールすることで、「米を主食としない外国人も、米を食べてくれるようになるかもしれない。」という考えをもっている。

「意見文を書く」という学習は、児童にとって初めての試みである。しかしこの活動では、米をあまり食べない外国人という相手に米のよさを伝えるという相手意識や目的意識をはっきりもたせることができる。そして、「米を食べてほしい」という自分の主張を相手に納得してもらうためには、それを支える根拠となる材料が必要であり、それらの材料を使っただけの文章の組立にも工夫が必要である。そこで、本単元では、二つのモデルとなる文章を比較する活動を通して、意見文に必要な材料や文章の組立に気付かせていくようにする。

以上のことから、児童に相手や目的意識をもたせ、書く必要のある事柄を取捨選択したり、整理したりすることができ、書くことの能力を育てるために有効であると考え、本単元を設定した。

3 指導方針

○「つかむ」段階

- ・ALTに「お米を食べてほしい」ことを訴える文章を書き、「お米を好きになってもらおう」という相手意識、目的意識をもたせる。

○「追究する」段階

- ・モデル文から、意見文を書く観点（文章の構成・主張・根拠などの内容や書き方）に気付かせる。
- ・書く観点をワークシートに整理し、そのワークシートの観点に沿って書く材料を集めたり、文章を構成したり、文章の記述や推敲したりできるようにする。
- ・意見と事実を区別して書けるように、主張や意見・考えは、ピンク色の短冊カードに書くようにさせ、調べたり聞いたりしてわかった事実や体験などは、水色の短冊カードに書くようにさせる。
- ・書いた二色の短冊カードを「組立シート」に並べることで、構成を考えられるようにする
- ・「組立シート」を3、4人のグループで書く観点に沿って読み合い、よさを伝え合うことで、説得力のある意見文になっているかどうか、点検し合えるようにする。
- ・交流の場を設定し、書いたものを読み返したり、読み合ったりする活動を取り入れる。

○「まとめる」段階

- ・3、4人のグループで読み合い、書く観点に沿ってよいところを見付けるようにさせる。見付けたよいところは、観点別に付箋紙に書いて友だちに渡すようにさせ、「書いてよかった。」という成就感を味わえるようにする。

IV 目標及び評価規準

1 目標

「お米を食べてください」という主張に説得力をもたせるために必要な材料を整理し、筋道を立てて意見文を書くことができる。

2 評価規準

	おおむね満足できる状況	十分に満足できる状況
国語への関心・意欲・態度	「米を食べてほしい」という意見を伝えるために、根拠となる事柄を選ぼうとしている。	「米を食べてほしい」という意見を効果的に伝えるために、材料を選ぼうとしている。
書く能力	主張に説得力をもたせるために必要な材料を選んで文章を書いている。	主張に説得力をもたせるために効果的な材料を選んで文章を書いている。
言語についての知識・理解・技能	意見文の構成の仕方について理解している。	意見文のさまざまな構成について理解している。

V 指導と評価の計画（8時間予定）

時	主な学習活動	□学習への支援 ◎評価項目
1	<p>書く目的をもつ</p> <p>○「『お米をもっと食べるべきだ』ということを訴える文章を書いてALTにお米を食べてもらおう」という目的意識をもつ。</p>	<p>□ALTが、「カナダ人は、あまり米を食べないこと、日本に来てからも、主食はパンが中心であること、米料理をよく知らないこと」など、カナダの食生活について話してくれたことを思い出させる。</p>

か む		<input type="checkbox"/> 米の耕作面積や農業人口の減少は、「米離れ」が原因でもあることなど、社会科資料も提示して、問題意識をもたせる。 <input type="checkbox"/> 総合学習で“米（ご飯）のよさ”などについて聞いたり調べたりしたことを書いたワークシートを活用させる。 ◎誰に何を伝える文章を書こうとしているのか理解している。 (ワークシート)
追 究 す	「意見文」とはどのような文章か知る <input type="checkbox"/> 提示された二つのモデル文を比較して、「意見文」を書くための材料や文章の書き方に気付く。 <input type="checkbox"/> モデル文から、自分の考えを明確に伝える意見文の書く観点「何を・どのように書くか」を考える。 ①構成について ②書く内容について ③文末表現について	<input type="checkbox"/> 主張だけの文章（モデルA）と、主張とそれを支える根拠等が加わった文章（モデルB）を提示し、以下の点について考えるように助言を行う。 ・読み手が「給食を残さず食べた方がいいな」という気持ちになるのはどちらの文章か？ ・どうして、そういう気持ちになるのか？ 《児童に気付かせたいこと》 モデルBの文章は、 ①他の人に訴えている感じがするから。 ②そう考える理由がきちんと三つ書かれているから。 ③言いたいことが二回繰り返されているから。 ④調べてわかったことや感想が書かれているから。 <input type="checkbox"/> 自分の考えが効果的に伝わるのは、どちらの書き方なのかを確認する。 <input type="checkbox"/> 「始め・中・終わり」の構成は共通しているが、書き方や書く内容に違いがあることに目を向けさせる。 ◎意見文を書くために必要な観点（組立・主張・根拠とその書き方）に気付いている。 (ワークシート)
る	書く材料を集める <input type="checkbox"/> 自分の意見を効果的に伝えるために必要な材料を探し、短冊カードに書く。	<input type="checkbox"/> 短冊カードは二色（ピンク・水色）を用意する。色を変えることで、自分が書いている文が事実と意見のどちらなのかを意識させる。 ・ピンク色のカードには、自分の意見を書く。 ・水色のカードには、その考えをもつようになった体験や、調べてわかったこと、データなどの事実を書く。 <input type="checkbox"/> 米について総合の時間に調べたこと、家の人にインタビューしてわかったこ

		<p>となどを書くようにさせる。</p> <p><input type="checkbox"/> 2～3枚は、書かないと説得力がないことに気付かせる。</p> <p>◎書く観点に沿って、根拠となる材料を選び出し、書いている。</p> <p>(短冊カード)</p>
4	<p>意見文を書く ①</p> <p>○書いたカードを「組立シート」に置いて、意見文として効果的な構成を考えながら意見文を書く。</p>	<p><input type="checkbox"/> 書いた短冊カードをどのように並べたら、説得力が増すか、試行錯誤させる。</p> <p><input type="checkbox"/> 段落と段落のつなぎ方を考えさせ、接続語やつなぐ役割になる文が必要な場合は、つけ足しをさせる。</p> <p><input type="checkbox"/> 観点に沿って自分の意見文を読んでみて、効果的な構成・相手に自分の考えが伝わる文章になっているか、もう一度確認するようにさせる。</p> <p>◎書く観点(明確な主張、根拠、文章の組立)に沿って、書く材料を選択して、文章を組立している。</p> <p>(組立シート)</p>
5		
6	<p>交流 (読み合い)</p> <p>○友だちの「組立シート」に書かれた意見文を読み合い、観点に沿って、よく書けているところや直した方がよい点などを伝え合う。</p> <p>○よかったところ、アドバイスを観点別に付箋紙に書いて交流する。</p>	<p><input type="checkbox"/> 「ふり返りのポイント」に沿って書いた文章を検討させ、足りない場合は、どう書いたらよいか、アドバイスするように指示する。</p> <p>◎観点に沿って文章を読み、アドバイスしようとしている。</p> <p>(付箋紙)</p>
7	<p>意見文を書く ②</p> <p>○原稿用紙に清書をする。</p>	<p><input type="checkbox"/> 原稿用紙の使い方を掲示しておいて、書くときの参考にさせる。</p> <p><input type="checkbox"/> 読み手が読みやすいように、ゆっくり丁寧に清書させる。</p> <p>◎読み手への伝達効果を考えて、ていねいに読みやすく書こうとしている。</p> <p>(原稿用紙に書かれた意見文)</p>
8	<p>意見文の発表会</p> <p>○ALTに意見文を伝え、感想を聞く。</p>	<p><input type="checkbox"/> JTEに、通訳してもらい、ALTに伝わるようにする。</p> <p><input type="checkbox"/> 発表の後、ALTの感想を聞く。</p> <p><input type="checkbox"/> 意見文を書いて伝えた感想を発表し合う。</p> <p>◎意見文を発表したり聞き合ったりすることで、意見文を書くことのよさを確かめている。</p> <p>(学習後の感想文)</p>

VI 第2次の学習

(1) ねらい

二つのモデル文を比較し、相違点を話し合うことにより、意見文を書くための材料や文章の書き方に気付くことができる。

(2) 準備 (教師) 提示用モデル文二種類・マジックペン・ワークシート・短冊

(3) 展開

過程	主な学習活動	時間	□学習への支援 ◎評価項目 (◆努力を要する児童への手だて)
つかむ	<p>○ALTやお米を食べない人たちに、「お米を食べてほしい」という思いを訴える文章を書くことを確認する。</p> <p>○今日の学習では、自分の考えを相手にわかりやすく伝える方法について考えることを知る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>「どのように書いたら、相手はお米を食べたくなるかな？自分の意見をわかってもらう文章(意見文)の書き方を知ろう。」</p> </div>	5分	<p>□日本人の主食であり、長年食べられてきた米が、現代は、生産量も消費量も減ってきていることをグラフや表で振り返らせる。</p> <p>□総合学習の時間に、「米のよさ」について調べたり、話を聞いたり、自分の体験を思い起こしたりしてきたことを確認する。</p>
ふかめる	<p>○意見文の書き方の観点を考える二つのモデル文を比較して、説得力のある書き方をしている方を選ぶ。</p> <p>○相手に納得してもらえるように自分の主張を伝えるには、「何を」「どのように」書いたらよいのか、意見文を書く観点について、気づいたことをワークシートにまとめる。</p>	30分	<p>□読み手が納得して「なるほど、そうだ。」とわかってくれるのは、どちらの文章なのか、考えさせる。</p> <p>◆Aには書かれておらず、Bに書かれているものは何か、見比べさせる。</p> <p>《Bの方が伝わる》</p> <p>①他の人に訴えている感じがするから。(～ほうがよい)</p> <p>②そう考える理由がきちんと三つ書かれているから。</p> <p>③言いたいことが二回繰り返されているから。</p> <p>④調べてわかったことや感想が書かれているから。</p> <p>◆文末表現に目を向けさせて、何が、どのような書き方で書いてあるのか、気づかせる。</p> <p>□ナンバリングをすると、根拠がいくつあるのか、また、書くときのまとまりもはっきりしてわかりやすいことをおさえる。</p> <p>◆意見と事実(体験)の区別がつくよう</p>

			<p>に、モデル文をまとまりごとに色マジックペンで色分する。</p> <p><input type="checkbox"/>もう一度、同じように自分の主張を書いた文がないか、見付けるよう助言する。</p> <p>◆「初め」の段落に書かれていた文と同じような文がないか、見つけさせる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>○意見文を書くための観点（組立・主張・根拠とその書き方）に気付いている。</p> <p>（ワークシート・発表）</p> </div>
まとめる	○今日の学習でわかった意見文の書き方の秘密をまとめる。	10分	<input type="checkbox"/> 机間巡視をしながら、指名して発表させる。

VII 第6時の学習

(1) ねらい

「意見文を書く観点」に即して作文を読み合い、自他の文章のよさに気付くことができる。

(2) 準備 提示用ふり返りのポイント・ふり返りワークシート・付箋紙

(3) 展開

過程	主な学習活動	時間	<input type="checkbox"/> 学習への支援 ◎評価項目 (◆努力を要する児童への手だて)
つかむ	<p>○今日の学習では、友達の作文を読み合い、文章のよいところを伝えたり、直した方がよいところをアドバイスし合ったりすることを知る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>「友達の意見文のよいところをたくさん見つけ、伝えよう。」</p> </div>	5分	<p><input type="checkbox"/>3、4人のグループ内で作文を読み合うことを伝える。</p> <p><input type="checkbox"/>観点到に沿ってよいところをできるだけたくさん見つけるように伝える。</p>
ふ	<p>○「意見文を書く観点」を確かめる。</p> <p>○「ふり返りワークシート」にある『ふり返りのポイント』（書く観点）に沿って、友達の意見文を読み合う。</p>		<p><input type="checkbox"/>「ふり返りのポイント」を掲示し、『意見文の書き方』としてまとめた観点（文章の構成、主張や根拠の書き方）について確認する。</p> <p><input type="checkbox"/>「ふり返りのポイント」に即して文章を読み、よく書けている点は、ふり返りワークシートのチェック欄に○を付けていくように指示する。</p>

か め る	<p>○友達の見文のよさを伝え合う。</p> <p>○自分の文章を見直す。</p>	30 分	<p>□直した方がよいところがある場合は、口頭で伝えるように話す。</p> <p>□友達の文章から、よく書けているところをできるだけたくさん見つけて、付箋紙に書き、渡してあげるように指示する。</p> <p>◆なかなか書けない児童には、「ふり返りのポイント」にある項目についてよいところを見つけ、その項目の言葉を使って付箋紙に書けばよいことを伝える。</p> <p>□もらった付箋紙は、ふり返りワークシートの『メッセージを貼ろう』の欄に整理して貼るようにさせる。</p> <p>□付箋紙を読んだり、アドバイスを聞いたりしたことをもとに、もう一度自分の文章を見直し、推敲させる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>◎観点に沿って文章を読み、アドバイスしたりよく書けているところを伝えたりしようとしている。</p> <p style="text-align: right;">(付箋紙)</p> </div>
ま と め る	<p>○意見文を読み合った感想を発表したり、聞いたりする。</p>	10 分	<p>□ふり返りワークシートに今日の活動をふり返った感想を書くことで、意欲的に発表できるようにする。</p>

A 給食を残さず食べよう

最近、給食を残している人を多く見かけます。でも、給食は残さず食べる方がよいと考えます。

B 給食を残さず食べよう

最近、給食を残している人を多く見かけます。でも、給食は残さず食べる方がよいと考えます。そう考える理由は、三つあります。第一に、給食を全部食べると栄養のバランスがとれて、体によいからです。給食は、栄養士さんが一日に必要な栄養量を計算して作っているのです。だから、残してしまうと栄養がたよって、健康によくないと思います。

第二に、給食を残すことは、生き物の命をむだにすることにもなるからです。食べ物はずべてもともとは生きていたものです。私は、生きたまぐろをさばいて、おさしみをしているところをテレビで見ることがあります。そのとき、まぐろがかわいそうだなと思います。だから、命をむだにしないで、全部食べようと思いました。

第三に、給食を全部食べると、調理員さんが喜んでくれるからです。調理員さんは、「くりの皮をむいたり、すまし汁に入れる野菜を切ったりするのはたいへんな作業です。」とおっしゃっていました。だから私は、苦労して作ってくれている調理員さんに、「残さず食べました。おいしかったです。」と、毎日言いたいと思っています。

このように、給食を残さず食べると、自分の体にも作ってくれた人にもいいことがたくさんあります。だから、給食は残さず食べる方がよいと私はいいと思います。